

創始期の郷土保護論 — エルンスト・ルードルフに
おける「郷土保護」の立場

桂修治

Zum Diskurs über Heimatschutz in seiner Anfangszeit -
Ernst Rudorffs „Heimatschutz“ (1897)

Shuji Katsura

Abstract

Heute noch gilt der Musiker und Komponist Ernst Rudorff (1840-1914) als Gründer der Heimatschutzbewegung in Deutschland und der Begriff „Heimatschutz“ geht auf seinen in der Zeitschrift „Grenzboten“ (1897) veröffentlichten Aufsatz zurück. Stilistisch dürfte der Heimatschutz-Diskurs aber - die überwiegend ästhetische und oft ästhetisierende Wahrnehmung der Natur- und Kulturlandschaft und der Appell zu deren Schutz aus moralisch-völkischer Weltsicht - den heutigen Leser nicht wenig irritieren. Mit dieser Arbeit sollen der Übersetzung von Rudorffs „Heimatschutz“ (Japanisch) einige Überlegungen zum Diskurs über Heimatschutz bei Rudorff vorangestellt werden. Dabei wird versucht, die historische Relevanz dieser Veröffentlichung unter Bezugnahme auf den zeitgenössischen Kontext zu erschließen und seinen Standpunkt zum Heimatschutz in Bezug auf die ihm oft zugeschriebene romantische und antimodernistische Haltung zu taxieren. Zugleich wird in seinem Text auf die Ambivalenz des ästhetischen Genusses der Landschaft und deren Schutz aus praktischer Perspektive hingewiesen.

I. はじめに

「郷土保護」(“Heimatschutz”)の著者、エルンスト・ルードルフ(Ernst Rudorff)は、1840年ベルリンに生まれ、ピアニスト、作曲家、音楽大学の教授として活動した音楽家であり、ブラームスやクララ・シューマンらとも親交があった人物である。しかし今日、ルードルフの名が知られているのは、音楽家として以上に、現在に至るまでさまざまな形をとって続いて来ている「郷土保護」(Heimatschutz)運動の創始者としてである。すなわち「郷土保護」の概念や思想はルードルフに由来するものとされ、ドイツ郷土・環境連盟(Bund Heimat und Umwelt in Deutschland)などの団体では、ルードルフは現在も「郷土保護」の創始者とされている。彼は、1880年にすでに「近代生活と自然との関係について」という論文を「プロシア年鑑」に寄稿し(“Ueber das Verhältnis des modernen Lebens zur Natur”. Preussische Jahrbücher 45. Bd. 1880)、この領域での発言を始めているが、この論文に対する社会からの反響は低調なものであったという。論文「郷土保護」はルードルフが1897年に雑誌グレンツボーテン(„Grenzboten”)に寄稿したものであり、ここで「郷土保護」の標語が初めて用いられる。この論文は、1880年の論文での記述のいくつかの部分を引き継ぎながら、「郷土保護」の概念を中心としてルードルフの主張をさらに展開したものである。この論文が同時代の自然保護・郷土保護活動家の関心と呼ぶところとなり、このことが社会運動としての郷土保護の動きにつながっていくことになる(Knaut, 37)。つまりルードルフの主張が、その起草から社会的な関心を集めるようになるまでに少なくとも17年間を要したことになる。その後「郷土保護」は20世紀に入ってもさまざまな版によって出版され続け、最も新しい版は1994年に出版されている。したがって「郷土保護」はドイツで、100年近くも読み続けられてきた著作ということになる。

しかしいうまでもないことではあるが、現在の環境保護、景観保護などの観点からこの論文を読むとき、理解しにくい点や、首をかしげざるを得ない箇所も多いことは事実である。100年以上前の環境や景観を見る観点、あるいはそれらの捉え方、さらにそこでの保護活動の動機づけや担い手についても、現代のそれとは大きな相違があることは容易に想像できることである。執筆当時の時代背景を再構築しつつ、この論文を批判的、あるいはイデオロギー批判的に読むことが求められるところであるが、同時に、現代の視点からこれを単純に否定するのではなく、環境保護・景観保護の歴史的展開を視野に入れながら、この論文の意義を捉え直してゆく作業が必要となると思われる。本稿の目的は、このような観点からこの論文の意義を探ることにある。

II. 社会運動としての郷土保護

この著書、「郷土保護」の歴史的意義の一つは、郷土保護団体としての郷土保護連盟の創設および社会的活動としての郷土保護運動の契機となったことである。この著書に共鳴した R. ミールケ(Robert Mielke, 1863-1934)、O. ホスフェルト(Oskar Hoßfeld, 1848-1915)、H. ゴーンライ(Heinrich Sohnrey, 1859-1948)、E. ハイク(Eduard Heyck, 1862-1941)、P. シュルツェ・ナウムブルク(Paul Schultze-Naumburg)らが準備に参画し、1904年、ドレスデンで「郷土保護連盟」(Bund Heimatschutz)が設立される(Schmoll, 395ff)。この連盟の初代の会長には、ルードルフの後継者の一人であったシュルツェ・ナウムブルクが就任している。その設立当初の規約には、次のような活動目的が記されている。

「連盟の目的は、ドイツの郷土をその自然的・歴史的に形成された独自性において保護することである。連盟の作業領域は次のグループに分かれる。a) 文化財保護、b) 伝統的な農村の民衆の建築様式の保護、c) 廃墟も含む地域景観の保護、d) 地域固有の動植物界や地理的特色の保護、e) 動くものの分野での民衆芸能、f) 慣習、風習、祭礼、衣装」(引用は Sieferle, 167 による)

その後この団体は、「ドイツ郷土保護連盟」(Deutscher Bund Heimtschutz, 1914)、「ドイツ郷土連盟」(Deutscher Heimatbund, 1937)、「ドイツ郷土・環境連盟」(Bund Heimat und Umwelt in Deutschland, 現在に至る)などと団体名を変え、その活動の方向性や重点も変化してきているが、ルードルフは今もって郷土保護、自然保護運動の創始者として言及されている。最近では2009年に、創立105周年を迎えた「ドイツ郷土・環境連盟」が、同連盟の公式サイトでルードルフを創立者として紹介している。¹

さて、19世紀末のプロシアでは政治的な目的を持つ団体は禁止されるが、多数の団体(Vereine)が存在したことが知られている。その中には、自然保護、野鳥保護などの領域に関わるものも多数あり、郷土保護連盟は、ルードルフ自身も述べているように、自然保護や景観保護に関わる多くの団体を束ねる上部組織としての役割を果たしたものである。さらにこの郷土保護連盟は、当時のプロシアを中心とするドイツ帝国において、景観保護に関して一定の政治的影響力を持ちえたことが、いくつかの事例において明らかになっている。論文「郷

¹ <http://www.bhu.de/bhu/content/de/aktuelles/pages/1238075211.xml>

土保護」の中に取り上げられている、ライン川の水力発電所建設に対する反対意見の表明もその一つである。ライン川に建設された最初の河川水力発電所として現在も運用されているこの施設(ラウフェンブルク)は、この論文の執筆当時、まさに建設計画の途上にあった。クナウトによれば、郷土保護連盟は、1904年から1906年にかけて、環境保護のための史上初の集団抗議運動に向けて新聞や議員を通じた呼びかけを行ったという。この運動は、この計画を阻止することはできなかったが、大きな社会的反響を呼び、このことが郷土保護を国の政治的課題の一つとして承認させるに至るのである(Knaut, 47)。この運動の影響を受け止めたプロシア政府は、建築の自由に歯止めをかけ、責任ある建築を行わせるための多数の法律を制定する。郷土保護連盟の活動が、1907年のプロシアにおける「醜悪化法」すなわち「景観に優れた地域の醜悪化を阻止する法律」(Gesetze gegen die Verunstaltung von Ortschaften und landschaftlich hervorragenden Gegenden)の成立を促す力となったことが知られている。さらにこの法律の影響は、ドイツ帝国のプロシア以外の国々にも波及したといわれる (Knaut, 46-47)。

III. ルードルフの「郷土保護」の概要

さて、この論文「郷土保護」で取り扱われているテーマや具体的事象は極めて多岐にわたっている。ここでは、主要なテーマを整理してみよう。

1. 農地政策（農地統合、共作地分割）による景観変化
境界の直線化、河川の直線化と水溝化
2. 森林の景観変化
森林境界の直線化；
森林補償に伴う諸問題；
広葉樹林からトウヒへの転換(ハルツ地方)
3. 建造物に関する景観変化
建築様式の変化（農村地帯における民族固有の建築様式から近代建築への変化）；
歴史的建造物の改装・改築: (事例)コンスタンツの公会議場の改築；
ブラウンシュヴァイクのシュテルン („Stern“) の改築；
都市景観の変貌；粗レンガ造り(Ziegelrohbau)の流行
4. 自然景観の加工・破壊
ドロマイト岩塊の破壊（計画）；エルベ河畔の採石作業；
水力発電設備による自然破壊：(事例)ハルツ地域ボーデ川のロストラ

- ツペ (Roßtrappe)付近での発電施設建設；
ラウフェンブルク (ライン河) の水力発電設備
- 5. 鉄道による景観被害
フライブルクの地獄谷(Höllental)での鉄道建設；
鉄道のための鉄橋による景観被害；
鉄道による地域住民の生活の変化
- 6. トーリズムの発達による景観の商業化
ケーブルカーと歯車式鉄道；
古城の観光化 (レストランなど)；
オーバーアマガウの受難劇の観光化；
(観光業への転換による) ヘルゴランドの漁業の衰退
- 7. 住民の服装
民族衣装、身分衣装の衰退；
農夫(Bauer)という呼称；
農業の近代化による農民の生活様式の変化；
- 8. オペレッタの流行、民謡の衰退

このように、この論文に取り扱われているテーマや対象を列挙してみると、この短い論文の中にいかに多くの種々雑多な現象が取り扱われているかが理解できる。現代の自然保護や景観保護の観点から見れば、ルードルフの論文は、未分化なエッセー的論述という印象を免れないが、このことは以下に述べるように、ルードルフが論じる景観(Landschaft)がどのような内容を持つものであったかという点に大きく関わっている。

IV. ルードルフにおける景観(Landschaft)とハイマート

ドイツ語のラントシャフト(Landschaft)という概念は、中世ドイツ語ではもっぱら領土や地域を表す概念として使われた。その後15世紀末になって、美的印象を伴う自然景観の絵画表現の術語として使われるようになり、17世紀になると、風景画との結び付きにおいてこのような概念使用がさらに広がったといわれる。こうしてラントシャフトの語は美術以外の領域でも使われるようになり、Grimmの辞書が示すように「美しい土地が見る者の目に与える印象」という意味に使われるようになる (Grimm: Deutsches Wörterbuch, „Landschaft“の項。Otto, 21)。したがって、風景、景観などと訳される英語のランドスケープ(landscape)に対応する意味領域は、後になって付加的に発生してきたものということにな

る。

「郷土保護」において取り上げられるテーマはいずれも、上記のような多様な意味でのラントシャフトに関わるものであるが、先のテーマリストからも明らかかなように、ルードルフにおける景観概念に特徴的なことは、現代の景観保護の議論で一般化しているような、いわゆる自然景観と文化的景観の区別がなく、この両者が混合的に論じられていること、さらにこのような景観に民衆の活動（労働・日常生活・祭礼など）も含まれていることである。論文の冒頭でルードルフは、このようなドイツの景観が短い年月の間に急速に変化してしまったことを次のように嘆いている。

「ここ数十年の間にこの世界は、そしてとくにドイツはどうなってしまったのだろうか。美しい姿の山々、川、城、古い都市の数々、つまり私たちの美しい、素晴らしい郷土はどうなってしまったのだろうか。かつてはウーラント、シュヴァープ、アイヒェンドルフのような詩人たちがこれらに魅了されて不滅の歌を書き、またルートヴィヒ・ティーク、アルニム、ブレンターノらは、ハイデルベルク城の美しい姿を讃えたのだったが。」
(Rudorff, 401²、下線は筆者)

ルードルフにおいては、保護されるべき自然景観や都市景観はしばしば、「美しい姿の」「絵のように美しい」(malerisch)、「美しい」(schön)、「素晴らしい」(herrlich)、「古い」(alt)などの形容詞と組み合わせられて提示される。このようにラントシャフトと組み合わせられる形容詞が美的知覚の領域に大きく偏っていることから読みとれるように、ルードルフの論述 — どのような現象が問題か、そこでどのような取り組みが行われる必要があるか、またそれはなぜか、等々 — の出発点となっているのは、観察者、すなわちまずルードルフ自身の目に与える印象としてのラントシャフトであるといえる。これらの対象が美しく、愛着を引き起こすものであるゆえに保護されなければならないという訴え、さらに、このような感情がドイツ国民に共有されるべきものであるとの主張が、論文の基調となっている。さらにここでは、景観に対する観察者の美的、情感的

² 以下、ルードルフの「郷土保護」からの引用は、次のテキストによる。Rudorff, Ernst: Heimatschutz, in: Grenzboten, 56. Jg. 1897, Nr. 2, S. 401 - 414 u. S. 455 - 468.

な関わり合い、さらにその背景にあるハイマートの観念が、観察対象を渾然一体としたものとして結び付けている。言い換えれば、ハイマートの観念が、景観を観察するパースペクティブを規定しているということができよう。

ドイツ語のハイマートは、ゲルマン語の“heima“（小さく狭い居住・所有・生活空間を指す）に由来するものとされ、啓蒙主義以前においては、集落(Gemeinde)に組み入れられた世帯(Haus)や農家(Hof)などの狭い帰属領域を指す概念であったといわれる。その後、この用語は異郷(Fremde)と対比的に用いられることによってその意味を変化させ、さらにホームシック(Heimweh)などの合成語として普及することによって、心的・情感的な同一化を伴う郷土の意味に変遷してきたことが知られている(Hartung, Barbara & Werner, 157)。19世紀に、おびたしい数のハイマートを歌う詩や歌(Heimatlieder)が生み出されたことは周知のとおりである。ハイマートは、その意味に関しては、確定的な実体を伴わない、極めて融通無碍な概念である。パウジンガーもいうようにハイマートは、「多分に思い入れや自己同一化によって特徴づけられる、いくらか持続的な社会的・空間的な場」といったあいまいな定義を許容するに過ぎない(Bausinger, 255)。ハイマートは、一方では、様々な対象や場への個々人の共感や自己同一化と結びついた心的世界を指すものであるが、他方では、集団に共有された知覚や経験を基盤として社会的・空間的な場を形成する概念でもある。ハイマートがナショナリズムと結合しやすく、しばしば国家イデオロギーの感情的基盤を形成するものであることも、この点に由来すると言えよう。

ルードルフの「郷土保護」において確認しておくべきことの一つは、ドイツの自然景観や都市景観と結びつけられたハイマートイメージがさらに、ドイツの「民族性」(Volkstum)に関係づけられ、郷土保護の基盤とされていることである。すなわちルードルフにおいて、自然や都市の景観を保護することの根拠として、美的な領域での感性が強調されるだけでなく、自然景観や中世的以来の歴史的な文化遺産への共感がドイツの民族性の源泉と捉えられているところに注目しておく必要がある。彼は「ザクセン地域文化財研究・保護委員会」が出した次のような声明を引用しつつ、そこでの民族の精神にとっての文化遺産の意味づけに賛意を表するのである。

「このような前時代の文化遺産は我々の国の誉れであり、我々の民族の誇りである。とりわけ、幼年時代からこのような文化遺産の姿に慣れ親しみ、老年までこれらとともに生きてゆこうという人間にとって、また、これらの文化遺産によって深く彩られた生活や創作の場に生きる人間にとっては、

これらの文化遺産はなおのこと貴重である。しかしこれら文化遺産の持つ意味はそれ以上のものである。それらは、我々の祖先の芸術活動のもたらした創作物として、我々の目を楽しませるだけではなく、しばしば我々自身の創造の模範ともなるのである。」(Rudorff, 404)

さらにルードルフがドイツの民族性の源泉と捉えるのは、建造物等の文化遺産だけではなく、そこには自然の景観も含まれる。彼は自然景観も「民族の精神的共有物」とであると位置づけ、「このような貴重な遺産を、現代の物質主義の無思慮によってそれが常にさらされている危険から遠ざけること、若者に、これらの遺産に対する崇拜と愛情を侵すべからざる聖域として呼び起こし、それを培ってゆくこと」(Rudorff, 406)が肝要であると論じているのである。この点においてハイマートは、国民的な広がりを持つアイデンティティの醸成のための基盤ととらえられているのである。このような郷土保護への主張が同時代人に向けたアピールとして一定の反響を得ることができた背景としては、同時代のドイツの社会に共有された社会的・空間的な知覚や経験、ないし共有された記憶という前提が存在したと見ることができる。

しかし、このような心情的アピールが反響を呼んだのとは逆に、郷土保護連盟における自然景観や都市景観そのものについての考察や分析については、同時代にすでに、そのアマチュア性が指摘されており、プロシア時代の自然保護運動の研究者 F. シュモルはこの点に郷土保護連盟の活動の限界があったと見ている (Schmoll, 398 - 399)。いずれにせよ、19 世紀後半における急激な工業化を目の当たりにした人々の不安と同時代におけるナショナリズムの高揚が、心情的アピールを前面に打ち出す郷土保護運動が社会に受け入れられる素地を形成したとみることができる。この時代は、学問としての民俗学(Volkskunde)が隆盛期を迎えており、また学校においてもすでに、郷土学 (ハイマートクンデ、Heimatkunde) が科目として導入されている。この時代の民俗学は、郷土保護という目的の遂行のための実学という性格が強く、そこで資料収集などにアマチュアの郷土愛好家たちが大きな役割を果たしたといわれる(Maier, 351)。

さて、上述のとおり、より古い意味でのドイツ語のハイマート概念は、限定された土地や空間との関係で用いられ、集落(Gemeinde)に組み入れられた世帯(Haus)や農家(Hof)などの狭い帰属領域を指す概念であった。この狭い枠組みにかかわっているのが中世以来の「居住権」(Heimatrecht)である。この居住権は、「集落において世帯として定住」し、仕事をし、結婚し、必要な場合には、集落からの保護を受ける権利を保障するものであった。しかし居住権を享受する

のは居住者のすべてではなく、そこに土地家屋を所有し、納税や物納によって集落を支える人々のみであった。このことから居住権は排除の原則として機能し、従僕や日雇い労働者、相続しない農家の息子などは、すべて郷土なき(heimatlos)、居住権を享受しない人々であった。このような意味での居住権の支配が解除され、個人の自由な移動が認められるようになったのは19世紀半ばのことであったという(Bausinger, 256)。ここでは近代化とは、このような居住権による個人の特定の地域共同体への拘束と地域共同体による個人の保護という両面の崩壊、個人の地域共同体からの解放（これは法的には移動の自由の定着によって実現される）を意味していたのである(Hartung, 163)。

ルードルフが自然景観を一変させた要因として嘆いている、新しい農地政策や森林管理は、まさに居住権に象徴される人間と居住地との強固な結びつきが流動化に向かい、社会が暫時個人化されてゆく過程を明確に示すものと見ることができる。

「ドイツで半世紀前に導入された農地統合（農地を耕作に都合がよいように統合すること）は、直線や直角という殺風景な区画原則をやみくもに実行に移してしまった。この施策は、その実際の施行も極めて暴力的で、この施策が嵐のように通り過ぎて行ったあとの田園風景は、国民経済の計算問題がそのまま形になったような様相を呈している。」(Rudorff, 402)

「このような農地統合には共作地分割が付随してくる。それは、牧草地とともに羊飼いや羊の群れも消滅させ、美しく生気に満ちた田園的な原初の風景も破壊し、家畜飼育の自然状態にかわって不健康な畜舎飼育を定着させるのである。」(Rudorff, 407)

いわゆる共作地分割(Gemeinheitsteilung)は、中世以来の村落に存在した共作地—農民はそれらの共有地の利用権を与えられていた—が、私的所有に移管されてゆく過程であり、農地統合(Verkoppelung)もまた、このような施策の結果生じる細分化された土地を統合し、農業の生産効率を上げようとする政策である。ルードルフは、19世紀に導入されたこれらの政策が田園地帯の自然景観を阻害していると嘆くのであるが、このことも居住権に象徴される、農民と集落(Gemeinde)との伝統的な結合が失われてゆくことと表裏をなす現象である。

このような社会の流動化を加速させるのは、いうまでもなく工業化の進行や鉄道の普及である。周知の通りドイツは、イギリスやフランスよりずっと遅れてではあったが、19世紀半ばから20世紀初頭にかけて、爆発的な人増加とそ

れによって引き起こされた農村からの人口流出、大都市への人口集中を伴いつつ、農業国から近代的な工業社会に変貌する。40年の間に人口は4100万人弱(1871)から約6500万人(1910)へと増加する。田園地域の住民は49パーセント(1878)から35パーセント(1913)への減少し、これに対して、大都市の人口は40年足らずの間に4.8パーセント(1871)から21.3パーセント(1910)に急増する(Sievers, 108による)。田園部から都市部への人口の移動にともなって、多くの工場労働者のための住宅が建設され、これらが都市の景観を大きく変化させたのである。ルードルフは、北ドイツや中部ドイツで流行した赤レンガ造り、とりわけ粗レンガ造りの新建築を批判するが、これもまたこのような社会構造の変化や工業化に必然的に伴ってくる現象であったといえる。これに対比されるのは、農村地帯における古い農家や民族固有の建築物である。そこでは伝統建築の美観や民族性の表出といった価値観と工業化に規定された生活的必然性との対立が明確に表れている(Rudorff, 403)。

ルードルフは、増設される鉄道路線や増えてゆく工場を目の当たりにして、とりわけ大都市に近接した地域では、地域の田園の性格を維持するために工場の建設は制限されるべきだと主張する。ルードルフの工場生産に対する批判は、一方では、工業生産品の「没個性さ」、「陳腐さ」に向けられるが、他方では工場労働と言う労働形態における「労働の喜び」の喪失に向けられる(Rudorff, 414)。

「...しかしこのような労働の喜びはそれ自体、人間本来の生きる糧である。日々の仕事を無関心にあくせくとこなしている工場労働者の場合がそうであるが、人間から労働の喜びを奪ってしまったら、そこに残るのは殺伐とした稼ぎだけである。そしてこのような人間は、失われてしまった労働の喜びの埋め合わせを、職業生活とは違うところに存在する享楽に求めるのである。このような事態にともなって生じる道徳的危険性がいかに大きいものであるか。」(Rudorff, 415)

農業や手工業的労働から工場労働に移行することによって人間の「労働の喜び」が失われ、それが人間の道徳的退廃につながるという論理は、農民や労働者からの観点とは無関係に観察者の側から語られる主張であり、この種の道徳主義を根拠として工場の建設の制限への訴えが展開される場所に、ルードルフの郷土保護の重要な特色を見ることができる。ルードルフが新しい社会グループとして、その退廃を嘆いている工場労働者は、この意味でまさに郷土なき

(heimatlos)人々であり、彼が厭うべき変化として批判する工場による生産活動や大都市の発達、このような郷土喪失(Heimatlosigkeit)を促進するものに他ならない。

またルードルフにとっては、鉄道の普及や工場生産の拡大などにみられる社会の流動化は、静的な自然観察の対極に位置する現象であり、さらに観光の拡大は、都市生活者の墮落した生活が田舎に持ち込まれることにつながることになる。ルードルフは工場立地地域の「住民の声」として、工業化が人々の精神に与える変化への懸念を、次のように語る。

「そうならば少女たちも少年たちも、もうどこへも女中や下男の奉公に行こうとは思わないだろう。だらしのない生活を覚え、昼間に工場で稼いだ金を夕方には浪費するようになるだろう。しかしわれわれのところには、金を持って来てくれる観光客は多くない。だから人々は工場ができることを望んでいるんだ。」(Rudorff, 413)

そして鉄道は「鉄道はこの種の欲望をそそり、田園の生活の素朴さと自足性を破壊し、小規模な商取引に残っていた仲間意識の中に、都会のめまぐるしい競争の毒を持ちこんだ」(Rudorff, 412)として批判するのである。

さらに、歴史的に見れば、19世紀後半は、いわゆる大衆トゥーリズムが大きな発達を見せた時代であり、その最も大きな原動力となったのが鉄道の普及であった。19世紀の半ば以来、ドイツには多数の鉄道路線（多くは私人による路線）が開設され、19世紀末に近づくと、それらはドイツ全体をカバーするネットワークを形成するまでに至ったことは鉄道の歴史が物語るところである。ドイツ帝国建国以降は、これらの国有化の動きも進行してゆくが、同時に、国境をまたぐ長距離輸送網も開設される。鉄道は人を大量に輸送する手段として、観光を後押ししたばかりでなく、車窓から見える、次々と変化する風景を楽しむという、それまでの交通手段にはなかった、まったく新しい旅行の楽しみ方を提供することによって、旅行の意味を大きく変えたと言われる (Hachtmann, 74)。ルードルフの論文において鉄道が問題視されているのは、産業のための輸送の側面以上に、人の移動に関する変化であり、中でも鉄道の発達がもたらす観光はルードルフが特に問題とする現象の一つである。ルードルフはここでも、これらの鉄道や交通網の建設に制限が加えられるべきであるとの主張を展開する。

「広域交通のためのドイツの大鉄道路線網（これは実際のところなくてはいらないものだが）が出来上がって以来、多くの支線が建設されてきたが、多くの場合その価値は疑わしいものである。今の時代に新しい鉄道を要望することは、緊急の場合においてのみ行われるべきことである。つまりそれは、真に切実な必要性がある場合であって、今日いくつかの地域で起こっていることだが、競合する交通機関がすべて閉鎖されたために緊急の必要性が出てくるというような場合である。しかしそれは、誰か個人の利益になるような、物質的利得の可能性をあてこんだものであったり、あるいは思い込みの交通の必要性やばかげた快樂欲求を満たすためであってはいらない。」(Rudorff, 413)

ルードルフは「広域交通のためのドイツの大鉄道路線網」を「なくてはならないもの」と評価する一方で、近距離の鉄道の建設に対して否定的な意見を述べているが、ここでも根拠の乏しい道徳主義と経済への無理解が表れているとみることができる。

ルードルフは一貫して、観光目的のための鉄道建設には厳しい批判の目を向けている。彼は、ドイツの山岳地帯の観光のために建設される登山鉄道を「ドイツの景観の汚点」として、「登山鉄道はどのようなものでも、断固として排除されなければならない」(Rudorff, 458)と主張する。一般に19世紀の自然トゥーリズムの流行は、当時の都市社会における日常生活の悲惨さからの一時的逃避(Hachtmann, 87)として説明されるが、ルードルフにおいてはこのような観光客には一切の共感はずられず、彼はむしろ観光地に集まる観光客を「旅行賤民」(„Reisepöbel“)と呼んではばからない。現代においては、観光と景観保護をいかに調和させるかは景観保護の重要なテーマであり、また景観保護のために観光を活用することも不可欠の観点の一つと言えるが、ルードルフにおいては、社会の変動や景観の変化に対する驚異が先行し、まだ、このような発想にいたりついていないと見ることができるであろう。

V. ルードルフの論述にみられる景観観察のアンビヴァレンス

これまで見たように、ルードルフの自然保護・景観保護に関する心情を方向づけているものは、近代化および工業化によって慣れ親しんだ自然景観や伝統的な都市景観が失われつつあるという認識であり、このような近代化や工業化のもたらす脅威への拒絶反応である。すなわちルードルフが自然景観や都市景

観の変化を嘆いているのは、美しいもの(das Schöne)、詩的なもの(das Poetische)、本来的なもの(das Ursprüngliche)、つまりは彼にとってのハイマートを形成する要件が失われようとしているという危機感からである。このような、自己同一性のよりどころとなるもの、慣れ親しんだラントシャフトが失われてゆくという、喪失への不安によってハイマートや森への傾倒が強められてゆくのは、まさにロマン主義の思考の枠組みを示すものといえる。当然ながらここでのラントシャフトとは、第一義的に、それを景観として観察する人間の美的知覚に投影される自然や都市のイメージである。

しかし逆に、このような美的知覚を中心とした自然景観や都市景観の捉え方は、地域で暮らす人間の生活的実体への無関心・無理解と表裏の関係にある。すなわち、自然景観や都市景観の観察は、その場所で生活を営む人間の観点からではなく、むしろその地を訪れる都市生活者の視点から行われるのである。景観観察の立場は、田園の称賛、とりわけ、農民への賛美となって現れている。すなわちここでは、田園と都市が対立する価値を体現するものとして取り扱われ、そこでは田園は古き良きドイツの民衆性を維持する場所として、都市は近代の道徳的に退廃した生活が集積する場所として捉えられる。工業化、鉄道、観光は、都市の「悪風」を田園地帯に持ち込み、ドイツの民衆性を破壊するものと考えられるのである。その際、田園の賛美者であるルードルフ自身がベルリン・ライプツィヒを中心として活動する音楽家、音楽学校の校長であり、基本的に都市生活者であり、生活上の利便性という点では近代化の恩恵を享受する人間であることへの自省が語られることはないのである。都市生活者が田園での人々の生活を、距離をとった場所から眺め、賛美するという、観察の関係性は、多くのロマン主義的詩人にも共通したものである。

ルードルフにおいて農民の職業像が賞賛されるのは、農民の労働風景が景観として観察する者にとって好ましいという理由からであり、ルードルフは農民の生活の実態については無関心である。彼が穀物収穫のための機械の導入に反対するのも、その騒音が田園ののどかな景観を害するという理由からであるが、そこでの農民の労働に対する無理解は次の箇所明らかに表れている。

「農夫は長い冬の多くの時間の暇を、収穫した穀物を脱穀しながら過ごしたほうがよい。このほうが、都市の歓楽を手に入れるために鉄道の次の駅までの退屈な時間をもてあましてよりずっとよい。そうすれば彼の筋肉のエネルギーは新鮮に保たれることにもなる。蒸気脱穀機の絶え間ない、神経をいたぶるうなり音に比べれば、脱穀のリズムは心地よい田園音

楽である。」(Rudorff, 465)

このような生活的観点を捨象した探勝的自然観は、鉄道によって促進されるツーリズム、地域が観光で収入を得ようとする事への批判にも端的に現れている。ルードルフの批判の対象となっているヘルゴランドの観光化はこの一例である。ルードルフは、この地域が観光地へと産業の重点を転換したために、かつてはロブスター漁で知られたヘルゴランドの漁師の生活が失われ、住民は観光だけをあてにする「怠け者」になってしまったと嘆くのである。

「(観光への依存によって) 所得が不安定になること、そしてまた、物質的・精神的な繁栄という祝福の唯一の基盤をなす、本来的な労働から離れてしまうことは、生活形態の変化に付随してくる危険な現象である。(…) 事物や人間を、それにふさわしい場所に残しておくことはできないのだろうか。技術の進歩が人間にもたらした贅沢のおかげで、人間はこんなにまで弱くなってしまったのだろうか。」(Rudorff, 463)

ルードルフによれば、住民の「本来の」(ursprünglich)仕事は漁業であり、そこから離れることは住民を弱いものにしてしまうと論じるのである。ここでは伝統的な生活様式を是とし、その変化を墮落と断じるルードルフの保守的な道徳主義を読み取ることができる。生活者としての地域住民の観点が無視されているのみならず、社会の変化の根底にある経済への無理解も顕著に現れている。

田園地帯を訪問する都市生活者による自然観察というロマン主義に典型的な探勝的立場のアンビヴァレンスは、ルードルフの鉄道への批判やツーリズムへの拒絶にも表れている。鉄道の発達が可能とした観光への批判と、彼自身が鉄道の利用者でもあり、鉄道の恩恵を被る立場にあることとの間の媒介がなされているとは言えない。当時、ベルリンの音楽大学の学長を務め、演奏活動も展開していた都市生活者のルードルフは、しばしば父親の生地であるラウエンシュタイン(Lauenstein)で休暇を過ごしているが、その際に利用した交通手段は鉄道であったはずである。ルードルフの自伝には、少年時代より、無類の鉄道好きであったルードルフ自身の姿が回想されている。ベルリンに居住していた両親(ベルリンは母親の生地)のもとで少年時代を過ごしたルードルフは、すでに1歳のころから、父の休暇旅行に連れて行かれ、それ以後、毎年、ベルリンからラウエンシュタインへと鉄道旅行をともにしている。彼の回想によれば、子供時代の旅行の楽しみはたいそうなもので、駅員になることを熱望する

ほどの鉄道好きであったという。彼は長じるに及んでも、ベルリンとラウエンシュタインの二つの地域を行き来したという。彼は、このことが、都市生活に偏らない、自らの生活観を形成するのに役立ったと述べる(Rudorff: *Aus den Tagen der Romantik*, I-570)。つまり彼自身がラウエンシュタインでの休暇を過ごすために鉄道で旅行することと、鉄道によって促進されるツーリズムを批判することとは、彼自身の中では矛盾することとは捉えられていないのである。

しかし、ルードルフが主張する郷土保護には、19世紀的ロマン主義的ハイマート概念とは一線を画する部分もある。「自然」の価値の称揚が、その場で実際に生活や労働を行うという営みから無縁なところで行われることは、ロマン主義的な自然観察に極限的に表れる現象であるが、ルードルフの論文に、このことに対する自覚、ないし弁解のような言説がみられることは興味深いことである。ルードルフは、論文「郷土保護」がグレンツボーテン誌に掲載された後、この論文に寄せられた種々の反響や批判にこたえて、「再び郷土保護について」(„Abermals zum Heimatschutz”)と題する補足を同じ雑誌で発表しているが、そこには、つぎのような自己弁護が記されている。

「特に私が、ものごとを美学的に捉える都市生活者であり、時たまやってくる歓楽的旅行者として判断を下しているとの前提には、反論しなければならない。私は田園地方の地所に居を構えており、農地統合や共作地分割を私自身の郷土、私自身の所有地において経験しており、実施に先立つ協議にも積極的に参加している。またこの地ばかりでなく他の土地でも、この現象をその結果も含めて観察する機会が十分であったのである。」

(Rudorff, Ernst: *Heimatschutz*. Bonn 1993, 88)

つまりここでは、訪問者の視点からの景観観察のもつアンビヴァレンスが明確に意識されているのであり、ルードルフが、近代化の脅威から過去に逃避することだけを志向するロマン主義的保守主義者と断定することができない所以である。上述した通り、ルードルフの論述は、近代化に向かう社会の変化と伝統的な郷土の保護との間を具体的に媒介するためのプログラムや戦略的思考に乏しいと言わざるを得ないが、彼が失われつつある郷土の問題点を具体的に指摘し、行動への方向性を示していることも事実である。つぎの Bausinger の指摘は、同時代的文脈におけるルードルフの論文の意義とその限界をさらに明らかにすることになるであろう。

「無数のハイマートイメージやハイマートへの感情的な告白は、現実の郷土の破壊をくいとめるといふより、むしろそれをやりやすくしたのである。自然を侵食する工場の建設や居住地域の建設、交通網の拡張などはすべて、何の抵抗もなく遂行できた。なぜならハイマートは囲い込まれていて、疲れた散策者のための公園になっており、決して勇気ある現実主義者の作業の場ではなかったからである。」(Bausinger, 260)

同じく郷土保護を意味するドイツ語の *Heimatspflege* は、ルードルフが郷土保護 (*Heimatschutz*) を提唱する以前にも流布していた概念であり、先述したとおり、同時代にもすでに、自然環境や文化遺産を保護する活動は行われていたことが知られている。しかしルードルフは、それが大きな社会運動としての効力を持つためには、自然景観や都市景観が毀損されつつあることをより明確に世間に知らしめること、そして個別化した運動の結束を図ることが必要であると考えるのである。ドイツ語の *Heimatspflege* と *Heimatschutz* はともに、郷土の保護を意味するが、後者においては、ハイマートが喪失されつつあるものとして認識されていること、および「保護する」(*schützen*) という動詞が通例「... から」(*vor ...*) という補語とともに使用されることから明らかなように、ハイマートが何らかの事態から守るべき対象として意識化されていることが、ルードルフにおいて重要である。そこではハイマートを阻害するものが具体的に指摘され、保護のための運動へのアピールも同時に行われているのである。ルードルフにとって、郷土の保護のための運動とは、まず、ハイマートが喪失されつつある現状を一般に意識化することである。当時のドイツに流行的に多数存在した協会 (*Vereine*) に関して、彼は次のように述べる。

「このようにおびただしい数の団体がつくられるのだが、そのうちには、人間のためになるものもしばしばあることは事実だが、おそらくそれと同じくらい、取るに足らぬものやただの『クラブ好き』に終わっているものもあると思われる。しかしここでは、ドイツの民俗性 (*deutsches Volkstum*) を守ること、ドイツの郷土 (その記念物や自然の美しさも含め) を、これ以上の毀損から保護すること、という目的において志を同じくする者が力を合わせるものが何よりも重要な意味を持つことになろう。というのも我々の力の根源は、他ならぬこの点にこそ存在するからである。」(Rudorff, 469)

VI. Rudorff の論文の歴史的意味

ルードルフが嘆いている、近代化・工業化による自然景観や都市景観の変化という事態そのものは、まさに現代においても本質的に異なるものではない。その変化を感知し、それに対する危機感を抱くことは、景観保護における、基本的に重要な態度であろう。彼の論文「郷土保護」(Heimatschutz)が、同時代において、まさにこのような自然景観や都市景観の変化に対する注意を喚起する意味を持ったことは、容易に想像できることである。ロマン派に特徴的であった、社会の変化の予兆に対する鬱々とした不安は、ルードルフにおいて、具体的な変化への言及に変わっている。現代のわれわれにとってもとりわけ興味深いことは、19世紀の終わりごろのドイツ社会にどのような変化が起こっており、それに対して人々、とりわけ教養市民階層がどのような反応を示しているかという事例が、「郷土保護」の中に鮮明に描かれていることである。ここでルードルフは、ハイマートという包括的な枠組みの中で、歴史・文化に結びついた景観がさらされている問題を指摘しているのである。

そして、ルードルフにおいては、景観保護の目的像もまた意識化されている。すなわち、彼は伝統の価値を重んじる保守主義者であるが、工業化、近代化のねじを逆に回そうとするプログラムを提示しているのではなく、工業化の行きすぎを制限すべきである、そこに一定の規制を加えるべきであるという主張をしているのである。言い換えれば、彼が目標ととらえているのは、工業化が自然や都市の景観を破壊することなく、それらと調和的に展開されてゆくことである。しかしそれは可能か、あるいはいかにすれば可能となるか。ここでは近代的な生活や生産様式と伝統的なものとの間の共存の道を探る可能性は選択されていない。ルードルフは W.H. リールの言葉を引用しつつ、次のように論じる。

「誰も、高度な条件に配慮した、農産物や自然の力の合理的な活用をやめさせようなどとは思わない。それと同じように、人類ないしは個々の国家に、鉄道や電気や工場の導入をやめるべきだと要求するのも、愚か者のすることだろう。しかしそれも事情によりけりである。これはすべて、容認する程度の問題である。森林を開墾するのは、リール(W.H. Riehl)がかつて論じたように、一定程度までは、進歩であり文化であるが、この程度を超えると、それは野蛮な行為になってしまう。」(Rudorff, 412)

節度やモラルに依拠しつつ近代化のマイナス面を抑制しようとするルードルフの立場は、近代化そのものに対する理解が未分化であったことを示すもの

といえる。そこでは本来の状態(*das Ursprüngliche*)に戻れという主張は、近代化の脅威にさらされた世界からの逃避としての意味しか持ちえないであろう。ここにルードルフの限界があったと見ることができよう。

しかしこのような考察によって、ルードルフの「郷土保護」の歴史的意義が否定されるものではありえないことも、確認しておく必要がある。すなわちルードルフの論述にみられる限界性や不十分さが、同時代のウィルヘルム時代の社会状況や文化状況に規定されたものであったことも、疑いのない事実だからである。ルードルフをはじめとする当時の郷土保護運動家に、自然科学や生態学の専門知識が欠けていたことを指摘することは可能であるが、そのこともまた、同時代的状況の制約を受けた事情であったことを忘れてはならないであろう。「こうした注文は、今日の状況を踏まえたものであり、ヴィルヘルム二世時代の社会では科学による改良の可能性が非常に限られていたことを見すごしている」とのローリンズの指摘(W.Rollins, in: J.ヘルマント: 森なしには生きられない, 156)も、この点で肯首できるものである。

ドイツにおける景観保護や文化財保護の歴史的展開についての考察を困難にする要因の一つは、これらの運動が20世紀の歴史の中で、民族主義的イデオロギーや反近代化思想とも結びつく複雑な問題と絡み合っていることである。伝統的にこれらの対象を取り扱ってきた学問領域である民俗学(*Volkskunde*)は、戦後、郷土保護という実践領域から明確に袂を分かち、経験的な文化学として、社会学的指向による研究分野に姿を変えたが、ここにも、この学問が第3帝国時代に果たした歴史的役割が大きく影を落としている。しかし1970年代以降、環境意識の高まりや戦後の進歩信仰への反省が生まれるのに伴って、自国の歴史や文化遺産への関心の高まりという、新たな動きも生まれてくる。マイアーは、70年代以降の西ドイツにおいて、ヨーロッパにおける地域主義的な傾向と並行して、小空間、ハイマート、地域、その歴史と文化への指向が明確になったとの変化を指摘している(Maier, 366)。「郷土保護」への評価も、歴史的距離性と歴史への回帰が入り混じった状況の中におかれているということができよう。

【使用したテキスト】

Rudorff, Ernst: Ueber das Verhältnis des modernen Lebens zur Natur. In: Preussische Jahrbücher, 45. Bd. 1880, S. 261-277.

Rudorff, Ernst: Heimatschutz. In: Grenzboten, 56. Jg. 1897, Nr. 2, S. 401 - 414 u. S. 455 - 468.

Rudorff, Ernst: Heimatschutz. Bonn, Reichl-Verlag 1993.

Rudorff, Ernst: Aus den Tagen der Romantik. Bildnis einer deutschen Familie. (hrsg.v.) Katja Schmidt-Wistoff. Frankfurt/New York 2006.

【参考文献】

Bausinger, Hermann: Heimat zwischen Ideologie und Wirklichkeit.

URL: <http://tobias-lib.uni-tuebingen.de/volltexte/2010/4842/>

Originalveröffentlichung: Identitätskrise und Surrogatidentitäten, 1989, S. 253 - 269. Ludwig-Uhland-Institut für Empirische Kulturwissenschaft.

Goebel, Klaus: Der Heimatkundeunterricht in den deutschen Schulen. In: Kluebing, Edeltraud (Hrsg.): Antimodernismus und Reform. Darmstadt 1991.

Hachtmann, Rüdiger: Tourismus-Geschichte. Göttingen 2007.

Hartung, Werner: "Das Vaterland als Hort von Heimat" - Grundmuster konservativer Identitätsstiftung und Kulturpolitik in Deutschland. In: Kluebing, Edeltraud (Hrsg.): Antimodernismus und Reform. Darmstadt 1991.

Hartung, Barbara & Werner: Heimat - „Rechtsort“ und Gemütswert - Anmerkungen zu einer Wechselbeziehung. In: Kluebing, Edeltraud (Hrsg.): Antimodernismus und Reform. Darmstadt 1991.

Knaut, Andreas: Ernst Rudorff und die Anfänge der deutschen Heimatbewegung. In: Kluebing, Edeltraud (Hrsg.): Antimodernismus und Reform. Darmstadt 1991.

Maier, Stefan: Volkskunde und Heimatpflege. Geschichte und Problematik eines distanzierten Verhältnisses. In: Kluebing, Edeltraud (Hrsg.): Antimodernismus und Reform. Darmstadt 1991.

Otto, Wolf-Dieter: Deutsche Landschaften - Ein Thema interkultureller Deutschstudien. In: Bogner, Andrea (Hrsg.): Jahrbuch Deutsch als Fremdsprache Band 31, 2005, S.15 - 36.

Overdick, Thomas: Landschaft und Museum. Theoretische Überlegungen zur Musealisierung von Landschaft. Museologie Online (Hrsg. von der Virtual Library Museen) 1. Jahrgang, Hagen 1999, S. 1 - 40,
<http://www.hco.hagen.de/museen/m-online>

Ringbeck, Birgitta: Architektur und Städtebau unter dem Einfluss der Heimatschutzbewegung. In: Kluebing, Edeltraud (Hrsg.): Antimodernismus und Reform.

- Darmstadt 1991.
- Rollins, William: „Bund Heimatschutz“. Zur Integration von Ästhetik und Ökologie. In: Hermand, Jost (Hrsg.): Mit den Bäumen sterben die Menschen. Zur Kulturgeschichte der Ökologie. Köln u. a. 1993, S. 149 - 181.
- (日本語版) J.ヘルマン (山縣光晶訳) : 森なしには生きられない。ヨーロッパ・自然美とエコロジーの文化史。築地書館 1999.
- Schmidt-Wistoff, Katja: Einführung: Ernst Rudorffs Lebenserinnerungen im Kontext ihrer Entstehungs- und Editions-geschichte. In: Rudorff, Ernst: Aus den Tagen der Romantik. Bildnis einer deutschen Familie. (Hrsg.v.) Katja Schmidt-Wistoff. Frankfurt/New York 2006.
- Schmoll, Friedemann: Erinnerung an die Natur. Die Geschichte des Naturschutzes im deutschen Kaiserreich. Frankfurt/New York 2004.
- Sieferle, Rolf Peter: Fortschrittsfeinde? Opposition gegen Technik und Industrie von der Romantik bis zur Gegenwart. München 1984.
- Sievers, Kai Detlev: "Kraftwiedergeburt des Volkes". Joachim Kurd Niedlich und der völkische Heimatschutz. Würzburg 2007.
- Sitte, Camillo: Der Städtebau nach seinen künstlerischen Grundsätzen vermehrt um "Grossstadtgrün". Reprint der 4. Auflage von 1909. Basel 2002.